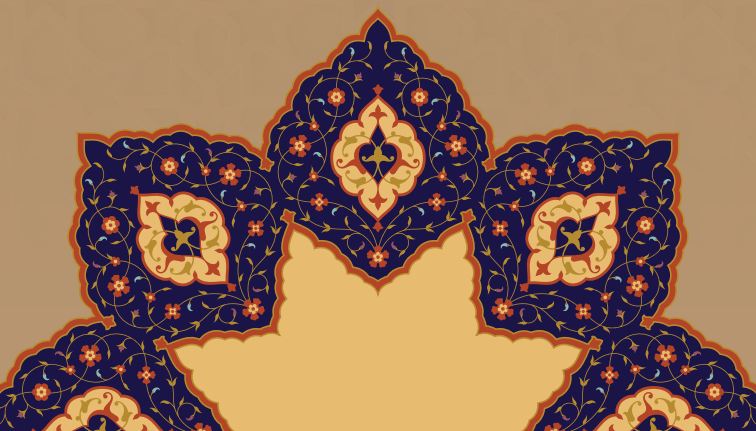




# イスラム とは何か





## イスラムとは何か



「イスラム」という語は、アラビア語で平和と服従を意味します。宗教を実践するムスリムは、心を込めて神に服従するようにつとめ、それにより現世と来世における平和を得ることができるようになります。「モハメッド教」という呼び方はイスラムの誤称であるばかりか、本来の精神に反するものです。

イスラムは、ユダヤ教、キリスト教と流れを同じくするアブラハムの三大宗教のひとつにあたります。それは唯一の神と、神が預言者たちに授けた導きを信じる、啓示に基づく宗教です。イスラムの預言者には、アブラハム、モーセ、ソロモン、イエスらも含まれています。したがってイスラムとは新しい宗教ではなく、いわば最終的な集大成であり、神からすべての預言者を通してすべての人々に啓示されたものと同じ、根源的な真理に満ちています。(聖クルアーン3章84節)

西暦610年頃、交易の盛んな町メッカにムハンマドという名の人物がいました。彼はことあるごとにヒ



ラーの洞窟をひとりで訪れては、生きることの不思議について熟考して過ごすことを好みました。ムハンマドは他の人との商売において常に誠実で正直だったので、友人や家族の間では「信頼に足る者」として知られていました。クルアーンの啓示が、大天使ガブリエルを介して預言者ムハンマドに伝えられ始めたのは、太陰暦のラマダン月の終わりごろのことでした。現代ではこの夜は「威力の夜」と呼ばれ、祝われています。以降、彼は23年の歳月に渡って啓示を受け取り続けました。授けられた啓示の聖句は記憶され、書きとどめられ、現代にいたるまでその内容は変わることなくムスリムたちに読み継がれています。

クルアーンに加えて、ムスリムには預言者の生涯と習慣(スンナ)についての記録があります。これには礼拝と浄めの仕方、巡礼を行う際の詳細な手順や、唯一の神への信仰のあり方を示すその他多くの例が含まれています。同時代の人々が見聞きした預言者の言葉や行いの聞き書きや記録などもあります。これらはハディースと呼ばれており、信仰を生きるためのガイドとなるものです。



# ムスリムは何を信じているのか



## 1. 唯一の神

ムスリムは神を信じます。ここでいう「神」とは、宇宙の唯一の創造主であり、維持者であり、管理者であり、唯一無二であり、比類なく、慈悲深い存在としての神です。ムスリムは神のことを「アッラー」とアラビア語で呼ぶのを好みますが、それはこの語に、偶像の崇拜と結びつきかねない複数形や、神にあるはずもない性別を連想させる女性形、あるいは矮小化（神々、女神、半神など）といった変化形がないためです。

## 2. 天使たち

ムスリムは天使たちの存在を信じます。またアッラーは天使たちを、罪を犯すこともなく性別も持たない存在として創造したと信じています。

## 3. 預言者たち

ムスリムは、アッラーはすべての人々に使徒と預言者を遣わしたと信じています。そのためクルアーンに記されているアダム、イシュマエル、イサク、モーセ、ダビデ、イエスをはじめとする聖書の預言者も忠実に受け入れられています（彼ら全員に平安がありますように）。すべての預言者は私たちと同じ人間の





中から、人々のための模範として選ばれた存在であり、重大な罪を犯すこともありませんでした。ムスリムはイエスのことを、ひとりの預言者として受け入れており、彼の処女降誕を信じ、また非常に尊敬しています。イエスの名は、クルアーン全体を通して100回近く言及されています。

#### 4. 啓典

アッラーからの最終の啓示であるクルアーンと、クルアーン以前に啓示された聖典の数々を信じることは、ムスリムの信仰を支える柱のひとつに相当します。クルアーンは、大天使ガブリエルを通して最後の預言者であるムハンマドに啓示されました。それはアッラーの使徒を通して人類にもたらされてきたすべての啓示を確認し、かつ確定するものです。その内容が現代にも十分に通用すること、また現代の科





学とも調和する章句に満ちていることなど、多くの天においてクルアーンはそれ自体が奇跡であるといえます。

## 5. 定命

ムスリムは定命を信じます。それは神の全能性に深くかかわっています。定命とは、アッラーが全知全能であり、また全存在であることの表われです。アッラーはその計画を遂行するための知識と力を有しており、かつ現世に無関心ではありません。アッラーは賢明であり、公正であり、慈愛に満ちています。人の身の私たちには、そのことが時として完全には理解できないこともあるかもしれませんが。しかしアッラーの行いは、何であれ知恵をもってなされるものです。

## 6. 復活

以下に引用するクルアーンの節は、審判の日も含め、信仰における諸原則の意義を説くものです。

「正しくあるということは、あなたがたの顔を東や西に向けることではない。正しくあるということは、アッラー、終末の日、天使たち、啓典、そして預言者たちを信じること。近い親族、孤児たち、貧しい者、旅路にある者、助けを乞う者、そして奴隷たちの解放のために自分の財を、それが大切なものであろうと費やすこと。礼拝のつとめを守り、喜捨をし、契約をしたときは契約をまっとうし、苦難や困難、また逆境の間もよく耐えること。これらの者は真実な者、これらの者は畏れる者。」

(聖クルアーン2章177節)

## イスラムの「五つの柱」



### 1. シャハーダ(信仰を証言すること)

イスラムの宗教実践には「五つの柱」があり、その最初の柱がシャハーダです。すべての信仰者が、「アッラーの他に神はなく、ムハンマドはアッラーの使徒である」というシンプルな定型句を唱えます。誠実な確信と共に、決して強制されることなく口にするのでない限り、この言葉は証言としての本来の意味を持ちません。この証言の意義とは、人生の唯一の目







的は神に仕え、神に従うことであり、それは審判の日  
にいたるまで全人類への使徒である預言者ムハン  
マドという模範に従うことによって達成されうると信  
じることにあります。誰であれシャハーダを宣言した  
人は、たとえそれ以外の義務を實踐していなくともム  
スリムであるとみなされます。

## 2. サラート(一日に五回の礼拝)

日々の礼拝は、アッラーに対する義務として一日  
に五回行われます。礼拝はアッラーへの信仰を強  
め、活力を与え、人をより高い道徳にめざめさせま  
す。また、心を清め、間違っただ行いや悪事への誘惑を  
防ぐことができます。男性のムスリムであれば、モス  
クに集い、日々の五回の礼拝を行うことが奨励され  
ています。女性のムスリムの場合は、自分にとりもつ



とも都合のよい場所で自由に礼拝することができます。

### 3. サウム(齋戒)

ムスリムは断食月であるラマダンを守り、明け方から日没までは飲食や夫婦間の性行為を控えるだけではなく、悪意や欲望を慎みます。それは愛、誠意、献身を教えてくれます。健全な社会的良心や忍耐力、無私無欲、意志の力を養います。また裕福な人にとっては、飢えに苦しむ人々の困難を理解する助けとなるでしょう。

### 4. ザカート(浄財)

イスラムにおける宗教実践とは、精神的な領域だけに限られるものではありません。それを行う余裕のある人には、物質的な義務が課されます。ザカートとは宗教上の義務であり、自分の所有する財産を浄めるために、一年間に保有していた貯蓄や資産の中から2.5%相当を支払うことを意味します。支払われた金額は、すべて地域社会のより貧しい人々のために直接的に使われます。不平等をなくすために、貧しい人々や孤児、困窮する人々の生活が楽になるよう、一定の金額を支払うことにより助けの手を差し伸べることがムスリムの義務とされています。イスラムは、物質的な富の機会に恵まれない人々と常に分かち合うことを奨励しています。ザカートの支払いとは、この分かち合いに貢献するために最低限すべきことに相当します。

### 5. ハッジ(メッカ巡礼)



これは経済的・身体的に可能な場合に、一生涯に一度行うべき義務とされています。年に一度、アッラーの館であるカアバ神殿の位置する聖地メッカに、ハッジ、すなわち巡礼のために集まるムスリムたちによって、すべての民族とすべての国々を結ぶ真の兄弟愛というイスラムの奇跡が、過去1,400年にわたり具現化されてきました。カアバ神殿はイスラムにおける唯一の巡礼地であり、毎日の礼拝の際に向かうべき方角でもあります。アブラハムの時代にさかのぼる立方体の形をした往古の建築物で、現在ではハッジの間、毎年約300万人の白い衣装を身に着けたムスリムたちがその周囲をめぐり歩きます。



## イスラムにおける救済



イスラムにおいて、すべての人間は無垢な者として生まれます。したがって原罪は存在しません。一人ひとりが自分の行いに責任を持ち、他人に自分の重荷を背負わせることも、自分以外の他人の重荷を背負うこともできません(クルアーン6章164節)。アッラーの知識に触れることにより、誰もがそれぞれに生まれながらの天性であるイスラムへと引き寄せられるのは自然なことです。アッラーの導きを求め、自堕落から心を純粹に保つことが、一人ひとりの責任として課されています。すべての裁きはアッラーにあります。救いを与えたり、罰を下したりする権利を持つ者は、アッラーをおいて他に存在しません。





## モスク



モスクのもっとも基本的な形はいたってシンプルです。礼拝のために用意された清潔な場所であれば、それだけで十分にモスクであるといえるでしょう。モスクは世界中に存在し、それぞれにその土地の文化を反映した様々な建築様式を取り入れています。中国の木造礼拝殿をそなえたモスクや、精緻な中庭を配したインドのモスクにはじまり、トルコには巨大なドームのモスクが、アメリカにはガラスとスチール構造を組み合わせたモスクなど、その範囲は多岐にわたります。

モスクに一步、足を踏み入れると、その建築やアラビア文字を基調とする書道芸術に、あるいは差し

込む光と、何世紀にもわたって日々の礼拝やその他の宗教行事のためにムスリムたちが集まった広々とした空間に感動を覚えることでしょう。毎週金曜日の集団礼拝は、女性であれば参加は任意ですが、男性の場合はモスクで行うことが義務付けられており、礼拝に加え、社会問題などを題材にし、ムスリムを道徳的な生活へと導くためのイマームによる説教(ホトバ)が行われます。説教を語り終わると、イマームは必ずクルアーンの以下の聖句を暗唱します。「本当にアッラーは公正と善良を、そして近い親族に対して[惜しまず]与えることを命じ、また不品行と非道、そして抑圧を禁じる。御方はあなたがたに教示している。それであなたがたも、憶えておくようになるだろうと。」(クルアーン16章90節)

神は特定の建物に閉じ込められる存在ではなく、また「大地はそのすべてがモスクである」という預言者ムハンマドの言葉の通り、イスラムにおいて、礼拝は必ずしもモスクで行う必要はありません。伝統的なモスクは、一般にドーム構造と、礼拝の呼びかけが行われるミナレットで構成されています。内部には並んで礼拝するためのスペースと、礼拝時には忠実にその顔を向けるべきとされているメッカの方角を知らせる壁龕(ミフラブ)の他は、祭壇やそれに類するものではありません。



## 礼拝とアザーン(礼拝の呼びかけ)



ムスリムが行う一日五回の礼拝は、イスラムの宗教実践の中心となるものです。顔、腕、足といった体の一部を洗い浄め、身体的な準備を整えたのちに礼拝が始まります。礼拝には、所定の動作に加えて、クルアーンをその原語であるアラビア語で朗読することも含まれます。礼拝の動作一回分はラカートと呼ばれ、礼拝の時間ごとにラカートの回数も異なります。

日常生活の様々な雑事に追われる中で、礼拝は体と心、そして魂を、想起と帰依の行為で包み込みます。数分の間、心配事から離れることで、その日一日



の活動に秩序と目的の感覚を吹き込むことができるようになります。ユダヤ教徒は立って祈り、キリスト教徒はひざまずいて祈りますが、それらに加えてムスリムの礼拝には、ひれ伏すという動作もともないます。集団で行う礼拝の場合は、ムスリムは肩と肩を寄せ合って一列に並びます。これはすべての信仰者が平等であることの象徴です。

礼拝の時刻は、太陽の動きに応じて算出されています。たとえば正午の礼拝時刻は、礼拝が行われる場所の天頂を、太陽が通過した直後に始められます。礼拝の時刻は、世界のどこにいるのか、また季節がいつなのかによって変化します。したがって一瞬たりとも途切れることなく、世界じゅうのどこかで常に礼拝が捧げられていることとなります。人々に礼拝の時刻を知らせるための呼びかけ(アザーン)は、ミナレットの上からアラビア語で行われます。これを行う者はムエズインと呼ばれ、朗誦が巧みで、かつすぐれた人格の者が選ばれます。最初のムエズインはビラールという名の、美声で知られるエチオピア人のムスリムでした。





## アザーンの内容（日本語訳）



アッラーは至大なり、アッラーは至大なり。

アッラーは至大なり、アッラーは至大なり。

アッラーの他に神はないことを証言する、

アッラーの他に神はないことを証言する。

ムハンマドはアッラーの使徒であることを証言する、

ムハンマドはアッラーの使徒であることを証言する。

礼拝に来たれ、礼拝に来たれ！

救済に来たれ、救済に来たれ！

アッラーは至大なり！

アッラーは至大なり！

アッラーの他に神はなし。

自然界のリズムに基づいた礼拝時刻のサイクルは、生活に一定の枠組みを与える役割を果たしています。日常生活の中で、折にふれこの果てのない時間・空間の連鎖から私たちを引き上げ、神という存在に近づくことを可能にするひとときをもたらします。







**DİYANET İŞLERİ BAŞKANLIĞI**  
トルコ共和国 宗教庁  
THE PRESIDENCY OF RELIGIOUS AFFAIRS  
رئاسة الشؤون الدينية



**TOKYO CAMİİ**  
東京ジャーミー  
**TOKYO MOSQUE**  
جامع طوكيو

151-0065 東京都渋谷区大山町 1-19

03-5790-0760

[www.tokyocamii.org](http://www.tokyocamii.org)